



令和6年度 関東農政局大豆セミナー

実需者が国産大豆に求めるもの

～豆腐・油揚げ、豆乳、味噌等のトレンドについて～

全国農業協同組合連合会 麦類農産部



当資料には、全国農業協同組合連合会が保有する内部情報が含まれているため、利用・保管などの取り扱いは、十分にご注意ください。
なお、当資料に含まれる情報は、全国農業協同組合連合会の資産であり、本案件以外の目的に利用することはできません。

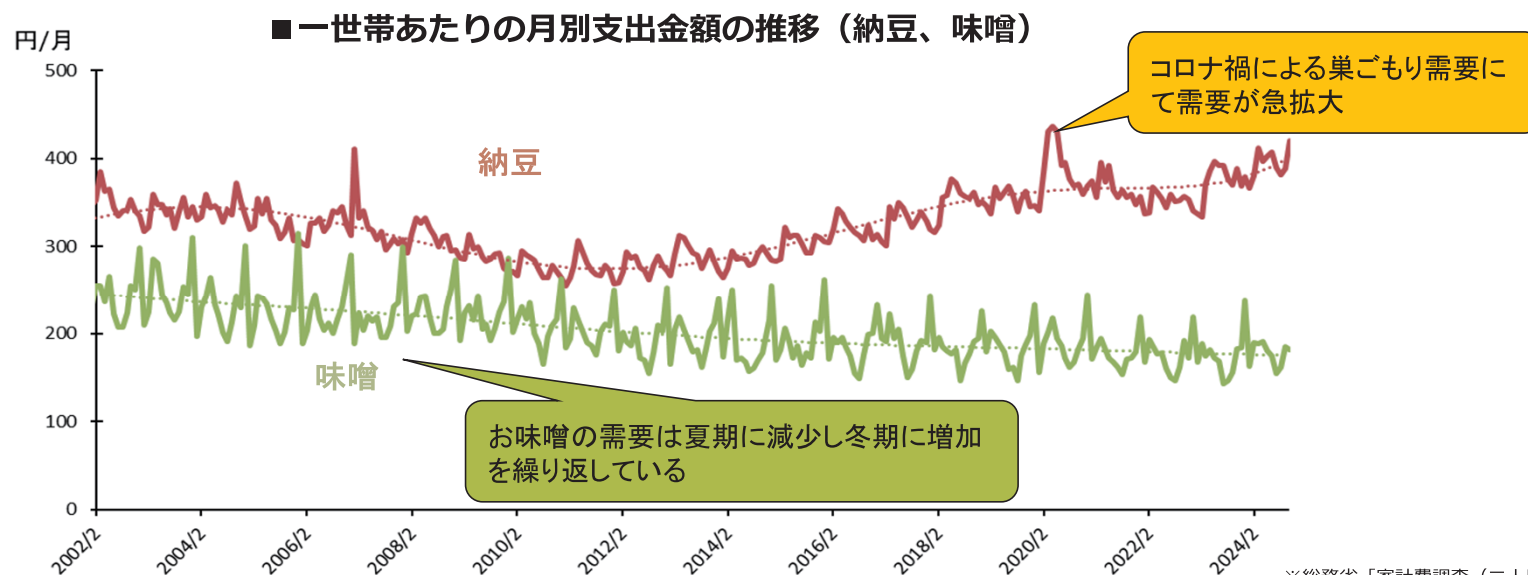
I. 納豆、味噌について

<納豆>

- ・ 製造コストの上昇により、メーカーが値上げを実施しているため販売単価が上昇しています。
- ・ 値上がりはしているが、健康意識の高まりなどから支持されていることで消費は堅調となっています。
- ・ 結果として一世帯あたりの支出金額が増加していますが、消費が大幅に増加している状況ではありません。

<味噌>

- ・ 簡便化に向かう世間のニーズにより、即席みそ汁については比較的好調です。しかし、家庭での味噌汁需要の落ち込みなどから、消費は減少傾向にあります。

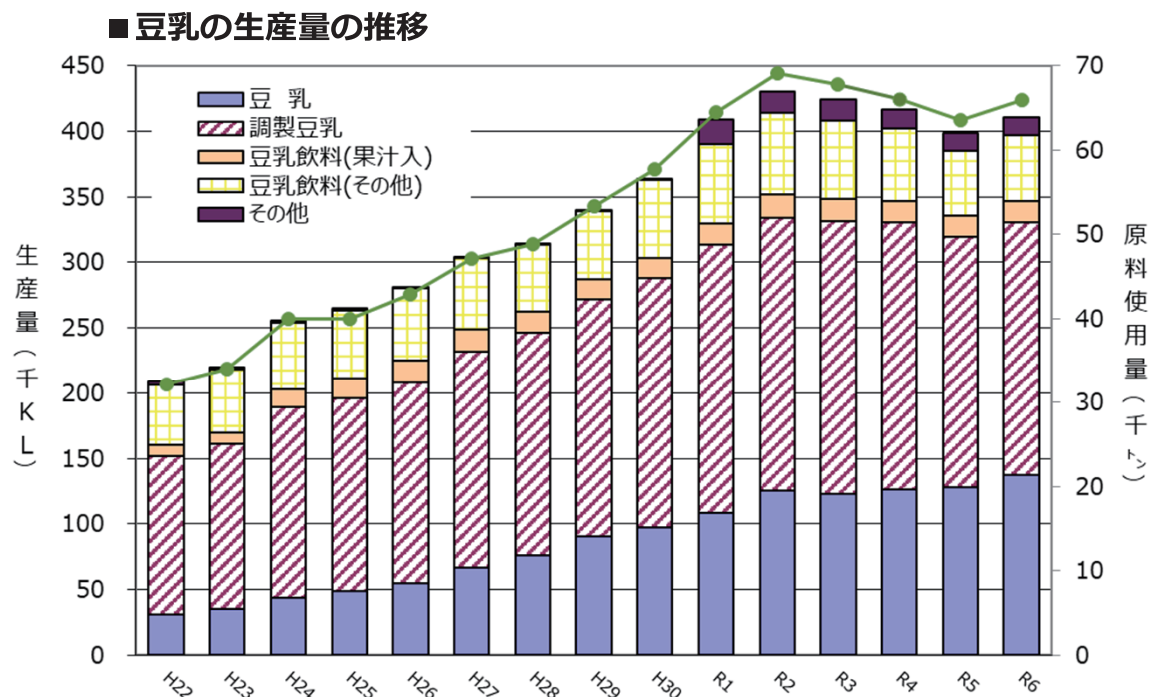


※総務省「家計費調査（二人以上世帯）」を基に作成

Ⅱ. 豆乳について

<豆乳>

- 令和2年度以来、生産量は減少傾向が続いていたが、令和6年度では前年を上回る生産量を記録しました。
- 「豆乳(無調整)」の生産量は増加傾向にあり、過去最高を記録しました。
- 「果汁入り豆乳飲料」や「フレーバー系の豆乳飲料(その他)」いずれも前年を上回っています。



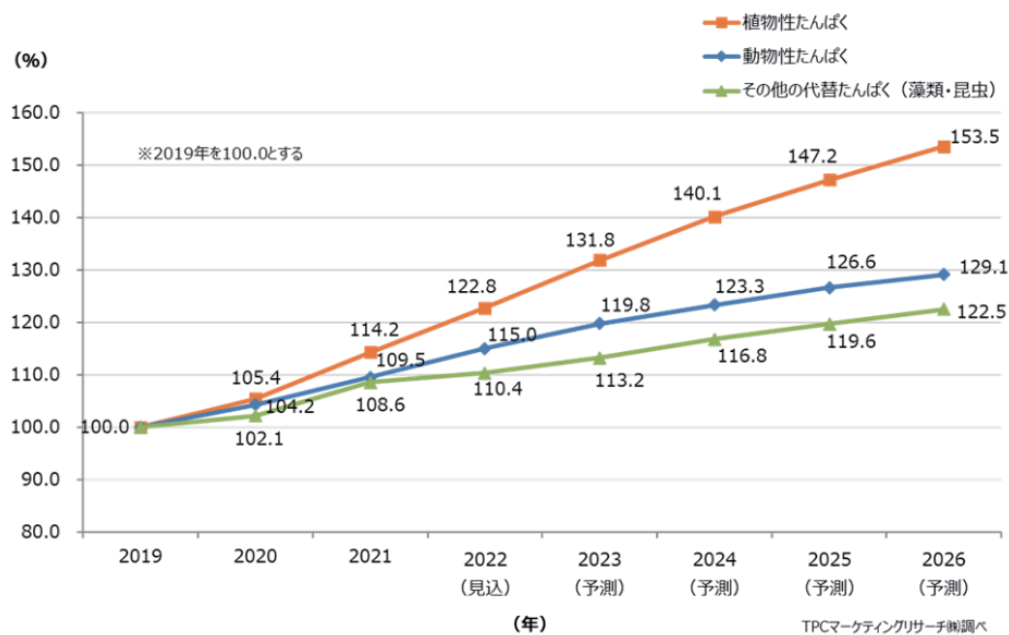
※日本豆乳協会「豆乳の生産量」を基に作成

Ⅲ. 植物性たんぱくについて

<植物性たんぱく(PBF)>

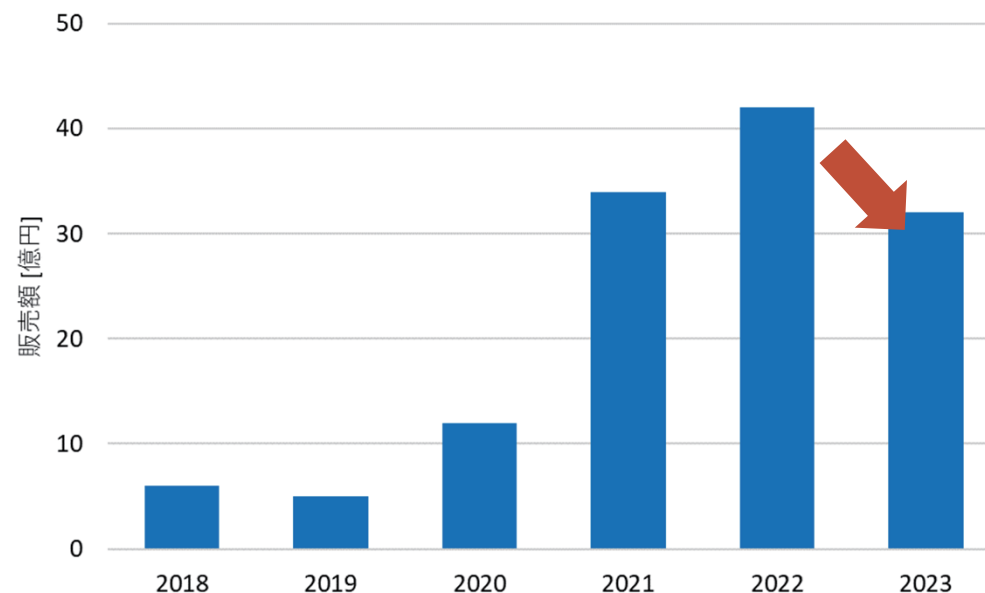
- 世界的な健康志向やサステナブルな食・環境問題等への関心の高まりにより、植物性タンパクの持つ機能性に注目が集まり、植物性タンパクを使用した商品開発および市場拡大が進んでいます。
- 近年では、加工特性がそれぞれ異なった大豆以外の植物性タンパク原料(そら豆やキビ、ナッツ類等)が続々と登場し、代替肉分野における大豆ミートの売り上げは、弾性や香り等といった課題により市場は縮小傾向にあります。

■ 植物性たんぱくの市場動向



※出典：TPCマーケティングリサーチ(株)

■ 大豆ミートの販売額

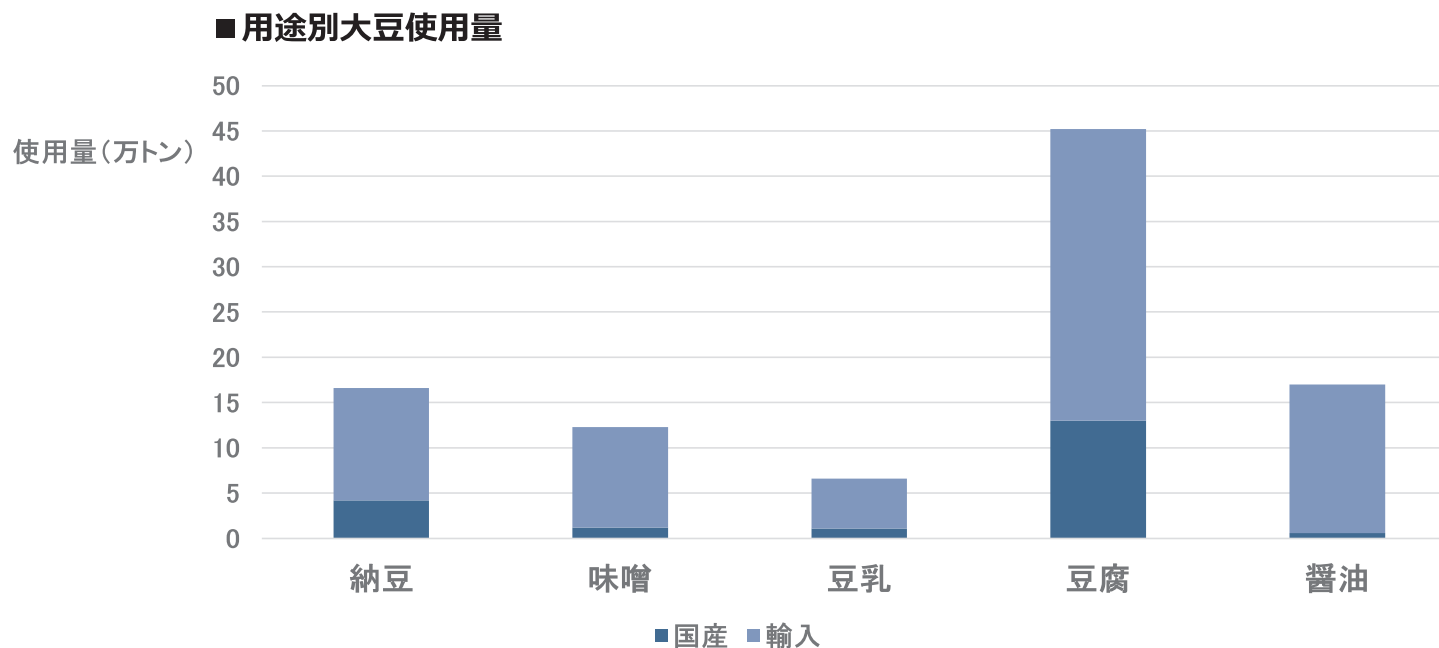


※ J A 全農調べ

IV. 各用途の国産大豆使用量について

<用途別大豆使用量>

- 用途別の国産大豆使用割合は、納豆4.2万トン(国産比率25%)、味噌1.2万トン(国産比率14%)、豆乳1.1万トン(国産比率17%)、豆腐13万トン(国産比率29%)、醤油0.6万トン(国産比率3% ※脱脂大豆含む)となっています。
- 量販店でのラインナップにより輸入大豆商品は残るものの、納豆、豆腐、味噌を中心に国産大豆の使用量を増やす動きがみられます。



※農林水産省「大豆をめぐる事情」より

V. 国産大豆生産に求められること

1. 国産大豆の生産量は年産毎に非常に不安定な状態となっています。原因は気象等の影響を受け豊凶差が大きく出ること、水田作が中心のため、水稻-麦とのブロックローテーションを含む転作状況に作付け面積が左右されることがあげられます。
 2. 一方で、大豆需要は堅調に推移している中、国産大豆の生産量が作柄で増減することで、実需者の方々は①既存の国産大豆使用商品においては需給逼迫時に原料大豆の高騰、②国産大豆使用の新商品開発においては原料安定調達が不透明、という点から国産大豆の使用量増加に踏み切れない現実があると考えられます。
 3. 国産大豆の需要拡大を目指す上では、「安定した生産・ご提案」が最も求められる課題となっています。
 4. また、安心・安全な国産大豆の生産に向け、農産物検査法に基づいた選別管理を行う必要があります。
- ➡ JA全農は安定した品質の国産大豆ご提案に向けて引き続き、播種前入札の上場、契約栽培の産地推進・販売先様ご提案、収穫後入札の確保、収量がより安定する品種の推進等、取り組んでまいります。

